

「こんなの民間芸術じゃない？」

私の調査地である、中国の陝北（陝西省北部）は今も豊かな民間芸術が残る地域ですが、その文化をどのように保存、発展させていくべきかは、一見するとみながお国の号令に準じているようでいて、その実、各県ごとの取り組み方は異なっています。

たとえば、地方都市である延安にほど近い安塞県は、剪紙や「腰鼓」と呼ばれる踊りが「国家級」の非物質文化遺産（無形文化財）の認定を受ける、いわば陝北の民間芸術の優等生ですが、ここは地方政府の文化部門が観光政策とも絡めつつ、熱心に「伝統的な」図案や技法の保護と継承の舵取りをしています。安塞では早くも70年代から研究者等の専門家を多く招き、農村家庭に保管されていた古い剪紙の実物型紙を収集し、整理・体系づける作業が行われており、次世代の剪り手の養成にはまずそれらの古い剪紙の模倣を通して技法や伝統的な吉祥図案の習得をさせます。中国の「非物質文化遺産」は、古くから「伝統」を守り続けてきたという「系統」の証を大きな判断基準とするため、安塞の方策はこの点で非常に有利に働いていると言えます。

それに比べて私が拠点にしている延川県は、地方政府は文化政策に力を入れておらず、かつて80年代に集めた（筈だという）古い剪紙図案等も今ではすべて行方知れず。その一方で、安塞よりも個人名が世に出ている剪紙作家が多いというのも事実です。延川の剪紙作家が「作品」として制作する剪紙は、自分の夢や記憶、或いは神々の姿など、農村の窑洞の装飾品としての元来の剪紙にはないモチーフが多く登場し、画風も作家それぞれ違うことが目指されます。TVなどで中継される「民間芸術祭」といった類のイベントの舞台に立ち、大勢の観客を前に、下画を描かず即興で白紙から大型作品を切り出せる、いわばパフォーマンスが出来る作家の登場も、延川の「作家」化を目立たせている要因の一つかもしれません。このような状況を見た都市の専門家や芸術家のなかには、延川の剪紙をニセモノ、指導者を「古き良き伝統的な民間剪紙の破壊者」と批判し、ひいてはそこで調査する私に「君はだまされている」と忠告や同情する人もいます。

このような安塞と延川の違いは、端的に言えば前者は「伝統工芸」として、後者は個人の「芸術」として発展が目

指されたことにあり、そこに優劣はないと、私自身は考えています。そして、この方向性の違いの最大の要因は、双方の指導者の「民間」や「芸術」についての考え方や立場の違いにあること自体に、興味をもっています。

陝北地域において、「民間芸術」の保護・育成が文化館と呼ばれる農民教育機関の最大責務となったのは、文革後の70年代末に遡ります。各県の文化館の幹部たちが競争するように農村調査を行い、優れた剪紙図案の収集に奔走したり、剪紙の名手を集めて学習班を開いたこの時代に、各県の民間芸術は方向づけられていきました。安塞を含めた他県が、専門的な芸術教育を受けた人材を指導者として置いたのに対して、延川県の文化館で指揮をとったのは、馮山雲という僻村の貧しい農家出身の男性でした。

1949年生れの馮さんは出身村の小学校教師を経て、集団農業時代に生産隊の副隊長（今で言う



写真1 馮山雲さん

副隊長）として農業労働をしていましたが、趣味の版画が延安の展覧会で高評価を得たのをきっかけに文化館の美術幹部に抜擢され、その後は自身もまた版画家や布絵作家として名を成していきました。

当時、農民たちが自分たちには「文化」がない（この場合の文化は、識字や学歴を指します）と考えていた状況下であって、馮さんは身の回りにありふれる自分たちの農村生活の中にこそ「民間文化」があるとして、その中の精神や智慧のすばらしさを農民達自身が認め、それぞれの生きる力に変えていくにはどうすればいいかと考えました。中でも剪紙は、馮さんによって「声なき農村女性の自己表現の手段」として最も重視されることとなります。

今号から数回に分けて、この「農民画家」を主役にお話します。彼と延川の民間芸術について考えることは、私たちが自分の身の回りの生活や文化を「新たな」眼で眺め、明日の糧を見いだすヒントをくれるかもしれません。画家としての彼の軌跡をお話する前に、まずは馮山雲自身が書いた文章を直接ご紹介することにします。

「小程村から出発して」と題されたこの文章は、彼が靳之林という北京・中央美術学院教授の油絵画家とともに企図し、2001年に出来上がった「小程民間芸術村」の設立や運営をめぐる思い出、さらにそこから派生して自分たちが住まう黄土高原やその文化について綴ったものです。

「小程民間芸術村」は、延川県の南側、地元では最僻地とされる地区にある「小程村」という小さな山村を民間芸術

の保護・発信地にしようと企画され、隣接する碾畔村に空き窑洞(写真2)をそのまま生かした陝北の生活文化博物館を作るプロジェクトと同時進行で進められました。両村は、「乾坤湾」という黄河がSの字形に大きくうねる雄大な景観を望む場所に位置します。(この場所を訪れた有為楠君代さんの157号の「黄土高原やぶにらみの旅①」をご覧ください!)

では前置きはこれくらいにして、馮さん自身の文章をかいつまんで見ていきましょう。

黄河湾の啓示

黄河の源はどこにある？

羊飼いの男の酒壺に、

フェルトを作る女の歌声に、

黄ばんだ史書のページの上に、

融け始めた雪の中に

私たちはどこからきて、どこに向かうのか。これは私たち民族の一人一人の関心事だ。黄河が幾千万年にわたって生み出した文明史は、民族精神に深く沈殿する源である。今日、黄土高原に黄河が作る大渓谷、その大きなうねりのただ中に位置する小程村を訪れた人々は、幾世代もの黄河文化によって深く刻まれた記憶を呼び起され、胸を高鳴らせる。97年初冬に初めてこの村を訪れた靳之林先生もまた、この土地に強く惹きつけられた一人だ。彼はこの地の民間文化の中にわが民族を探すべく、小程民間芸術村や碾畔原生態博物館の設立に着手した。

一匹の龍のごとく身をよじらせ黄土高原から大海へと駆け抜ける黄河。なかでも黄河が勢いよく巨

大な弧を描く乾坤湾はまさに壮観だ。にもかかわらずここが最近まで知られることがなかったのは、ひとえに深い山谷に囲まれた痩せた土地であり、交通が不便で訪れる人などいなかったからである。「渴いた河辺は石ばかり、星月明かりで牛が渴わき死ぬ」という村の人たちの言い草からは、かつてこの地がどれほど貧困であったかがよくわかる。旱魃以外に洪水もまたひどく、雨が止まぬと泥水となった河水が氾濫し、あっという間に村を呑み込んだ。しかし、勇ましく堅強な黄河の申し子たちは、一つ、また一つと災難に打ち勝ち、幾世代にもわたってこの地で生き抜いて子孫を繁栄させてきたのだ。彼らはいふ。「旱魃によ

て鋼は打たれ、洪水が流れ去った後には精神が沈殿する」。

『天書』を読んだことがあるだろうか？ 清水湾の岸壁の上には一冊の天書が刻まれている。言い伝えによればこの天書のまわりには八チの巢が見張りする洞窟があり、中には無数の宝があるという。天書を解読した者はその宝庫の鍵を見つけられると言われるが、これまで多くの人々がこの書を読もうとしたものの、わかる者はい

なかったそうだ。

この地にはこんな話も伝わる。ある若い坊主が老和尚に向かって、何年も仏経を学んでいるのに、道理がわからないと教えを請うた。老和尚は、自分は字が読めないからお前が経を読んで聞かせてくれれば、その中の道理を話してやろう、と答えた。若い坊主は、文字も読めずにどうやってその道理を知ることができるのかと尋ねる。老和尚いわく、「道理と文字とは別物だ。道理を天に輝く月に例えるなら、文字はお前や私の手指に同じ。指で月を指すことはできても、指は畢竟、月ではない。月は指で指さずとも見えるのだから」。

天書もまた手指に似て、指すことはできても届かない。その中の道理がわかって初めて、この土地から宝をとりだすことができるのだろう。靳先生もまた天書を読んだが、彼はむしろ暑さ寒さの年月を通じて、果てしない黄色い大地と向かい合い、大地のただ中からこの地の宝の鍵を探し出した。そう、小程村への路を。

97年に靳之林先生は乾坤湾で初めて油絵を描いた後、付近一帯

の多くの村々、山々をめぐり、くまなく調べあげた。役人が「一つ一つの山丘にどんな意味があるというのです？」といぶかしがると、靳先生は「山の中に入り込むと、山は見えず。君たちは君たちの土地をまだ知らない」と軽やかに答えた。「エジプトのピラミッドにもアメリカのグランドキャニオンにも行ったが、ここの素晴らしさにはかなわない」。それ以来、彼はこの地を第二の故郷として、毎年訪れるようになった。2001年だけでも半年あまり滞在し、油絵を描くとともに、古い村々や墳墓の調査を重ね、民間芸術や土地の習俗を記録した。こうしてその年の年末、県政府の協力を得て、小程民間芸術村の創立に至ったのだ。



写真2 古い村をそのまま利用した碾畔博物館



写真3 碾畔博物館の中



写真4 乾坤湾

ある少女の秘密の裏に

昔から、民謡(民謡)は男が喉を鳴らして歌うもの、剪紙は女の心を映し出すものだと思っていた。この地で「男は憂えて歌うたい、女は憂えて涙ぐむ」と言われるのは、男は苦しみや悲しみを抱えた時に歌うことでその苦悶を表すが、日がな一日家にいる女達はその苦悶を剪紙に表すほかないからだ。こんな秧歌を聞くと、彼女たちの心のあらわし方がよくわかる。

初三も十三も二十三(日)も／姉妹は牡丹を刺繍する／長女が刺すのは石榴花、二女が刺すのは牡丹花／残った三女は刺繍が下手で、足ふみ車で糸紡ぐ

小程村には幾人かの、靴の中敷きの刺繍に長けた少女がいたが、はずかしがりやの彼女たちは、「秘密」を他のひとには知られるわけにはいかなかった。そんな彼女たちに、中敷きを斬先生に見せるよう勧めたのは隣家のおばさんだった。一人の少女が作った中敷きを見た斬先生は、このご時世に少女がこれほど古い図案を刺繍できることに、驚いたという。

それを聞いて私は、「刺繍は女たちの仕事ですからね。本もテレビもなければ、何かやるのが欲しくもなりますよ」と何の気なしに言った。「だが、こんなに古い図案を若者が作れるのはめずらしいと思わないか?」と斬老師。私は意固地になって「こんな辺鄙で遅れた村、文化がないですからね」

と答えると、とうとう斬老師の雷が落ちた。「文化とは何か、ここいらの文化が内包するものを前が分かっているとでもいうのか?今すぐお年寄りに聞いてまわるといい。この図案にどんな意味があり、何のために使われるのか」。

その後数日にわたり、何人もの家を訪ね歩く中で、一人の老女がこんな秧歌を聞かせてくれた。

十七八の娘が門前で／雄鶏と雌鶏の追いかけてこ
を見ている／呼ばれた父親が娘を見ると／娘の眼に溢れる涙

「女の子が大きくなったら婿探ししてやらないとねえ。」と老女。私はおどけて

「口バは瘦せると筋が増え、女は歳とりゃ心配事が増える。あんたにどうして人様が娘婿を探してるのがわかるんだい?」

と私は尋ねた。

「靴の中敷きに何が刺繍してあると思ってるんだい? “魚戯蓮花”(の図案)とは夫婦がいい縁を結ぶやり方だ。あんた、そんなことも知らないでよく幹部が務まるねえ」老婆はそう言って大笑いした。

この数日間で私は少なからぬ知識を得た。民間芸術の

中の刺繍、剪紙、麵花(花饅頭)、布のおもちゃ、棗細工や草編み細工、民謡、故事、童謡……ここにまだこんなにもたくさんの民間芸術があるとは思ってもよらなかった。

ある老人にこう言われた。

「あんたたち街の人は電気を煌々と灯して夜にもテレビが見れるけど、わしら村のもんは電気もなくテレビも見れないし、何かしらしたくもなるってもんだ。」

もし、この村に電気が通ったら、人びとの気持はテレビに向かい、こんな手仕事をする心持ちも失われていくのだろうか。そう思ったら、だんだん彼女らの手仕事に興味が湧いてきて、“秘密”の影に一体何が隠れているのか知りたくてたまらなくなった。これらの魚や蓮、石榴が本当には何なのか質問しようと婆さん達を訪ねてまわったが、どんなに訊いても笑うばかりで答えてくれない。しかたなく爺さんたちに交じってだべっているときに、彼らがしてくれたある笑い話に、私は秘密の一端を垣間見た気がした。

昔々あるところに、村の子どもたちを教えるひとりの先生がいた。ある日、貧家の男の子がご飯をご馳走するから

と言って先生を家に連れて帰った。子どもの母親は仕事を片付けてから食事を出すといい、オンドルの上であぐらをかいて糸巻きを続けた。母親がズボンに穴が空いているのを恥じるのを見て、息子は機転をきかせてこう言った。「一輪の蓮の花が今にもズボンに咲きそうだ」。先生はこの子の賢さを誉めた。この話を聞いた金持

ち夫婦がわが子の賢さを知らしめようと、破れてもいないズボンに鉄で穴をあけ、同じく先生を食事に招いた。父親はわが子が例の話をするのを待ったが、いっこうに話し始めない息子にしびれをきらして平手打ちにした。見かねた母親が「ほら、蓮の花、蓮の花(蓮花)!」と声をかけると、うるたえた息子は慌てて表に出て、鎌の柄(鎌把)をもってきて父親に渡した。

私は民間芸術の中の「蓮花」の意味を思って笑ってしまった。つまりは、「魚戯蓮」は男女の愛の囁き、「魚鑽蓮」は男女の結び合いを、「石榴囊牡丹」は賢男と美女のよき結婚を…というように、たくさんの隠れた意味があるということだ。こういうなんとも歯切れの悪い秘密こそ、民間芸術の真の意味合いに違いない。

(次号は、「蠟燭の灯りの下での剪紙学習班」につづく)

◆丹羽朋子(にわともこ)

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍中。中国陝北の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして活動中。一芯社ウェブサイト(<http://yixinshe-books.jimdo.com/>)に掲載中。



写真5 小程村の名物おじさん